

ヒトラーの語りの手法

—ナチ党集会での演説(1925年12月12日)を例にして—

高田 博行

ニュースピーク [新語法] の目的は、イングソックの熱狂的な支持者固有な世界観や精神的慣習に対して一定の表現手段を与えるばかりでなく、イングソック以外のあらゆる思考方法を不可能にするということであった。

(G. オーウェル [1984年]、393-394 頁)

1. 「語られることばの魔力」

傘もささず聴衆とともに雨に濡れ熱弁するヒトラーの姿¹⁾——ヒトラーの演説に火や光による視覚的演出と、ファンファーレやシュプレッヒコールによる聴覚的²⁾演出があったことはよく知られているが、³⁾この雨のなかの光景を思い浮かべると、視覚と聴覚だけでなく濡れるという触覚⁴⁾までも利用しているヒトラーの計算高さが見えてくる。「知らな

1) ケンボウスキー (編) (1973) 『君はヒトラーを見たか 同時代人の証言としてのヒトラー体験』(19頁)に、演説時に「雨まで宣伝に利用」したように見えたヒトラーのエピソードが叙述されている。

2) 音声データとしてのヒトラーの演説を音調的に分析し、演説を演説者と聴衆との相互行為として見て、聴衆の反応に着目したBeck (2001) : Politische Rede als Interaktionsgefüge: Der Fall Hitler は、聴覚という観点からたいへん興味深い研究である。

3) ミュンツェンベルク (1995) 『武器としての宣伝』169頁参照。党大会の演出については、平井正 (1995) 『21世紀の権力とメディア ナチ・統制・プロパガンダ』91頁も参照。

4) 演説会場で密集して座るということも、触覚的計算に入ると見ることができよう。

いうちに口から体内に入って頭を朦朧とさせる麻薬⁵⁾とクレムペラーが称したナチ言語なるものは、このようにして体内へ侵入したのだ。

もちろんポイカート（1991）らの日常史研究が指摘するように、ナチ・プロパガンダの効果を自明視することは、ナチ・プロパガンダを鵜呑みにするのに等しく危険であろう。⁶⁾ それでもなお、ナチズムの「祭儀の中心はあくまでヒトラーの演説⁷⁾」であったのであり、ヒトラー自身が『わが闘争』第1巻（1925）のなかで「演説の威力（Gewalt）」、「語られることば（gesprochenes Wort）の魔力」についてこう明言している：

この世界における最も偉大な革命は、決してガチョウの羽ペンで導かれたものではないのだ！ [...] 宗教と政治に関わる偉大なる歴史的雪崩にきっかけを与えた力は永遠の昔から、語られることばの魔力だけだった。とりわけ一般民衆は、いつもただ演説の威力の支配下にある。⁸⁾

『わが闘争』の「序言」においても、「この世の偉大な運動はいずれも、偉大な文筆家ではなく、偉大な演説家にその進展を負っている⁹⁾」と、ヒトラーは述べている。大衆は心理操作の標的としやすい存在であると同時に、大衆こそが歴史を動かす力を持っているという認識がここにある。¹⁰⁾ そしてこのような「運動」を貫徹させるための情宣活動、つまり

グラウザー（1987）『ヒトラーとナチス 第三帝国の思想と行動』（115-121頁）によれば、厳粛で圧迫するような雰囲気のある場所、ぎっしりと身動きが取れないような場所が演説会場に選ばれたという。綿密に計画されていた集会の演出法については、若田恭二（1995）『大衆と政治の心理学』151-152頁も参照。

5) クレムペラー（1974）『第三帝国の言語<LTI> ある言語学者のノート』137頁。

6) 田野大輔（2003）『民族共同体の祭典——ナチ党大会の演出と現実について——』185頁参照。

7) 平井正（1995）前掲書 100頁。

8) 『わが闘争（上）』161頁。（以下『わが闘争』からの引用にあたっては、原文と参照した上で筆者により一部訳文を変更した。）

9) 『わが闘争（上）』3-4頁。

10) 藤竹暁（2002）『ワイドショー政治は日本を救えるか テレビの中の仮想政治劇』26-27頁参照。

プロパガンダの屋台骨をなしているのは、まさに語られることば、演説なのである。

2. プロパガンダとレトリック

プロパガンダ (Propaganda) は、本来ラテン語で「繁殖させる」、「種子をまく」という意味であり、特定の考え方を普及させることを表した。¹¹⁾ 送り手と受け手との関係から考えると、プロパガンダの最終目的は、「受け手がその立場があたかも自分自身のものであるかのように『自発的に』受け入れるようにする」¹²⁾ ことである。プロパガンダという語を、ここで次のように定義しておこう：

プロパガンダは、プロパガンディストの望む意図をさらに促進するような反応を得るため、知覚を形成し、認知を操作し、行動を指示しようとする、周到で組織的な試みである。¹³⁾

したがって、プロパガンダが試みられるときには、受け手側の注意を惹くために、印象の強さと受け入れやすさが追求される。送り手は、自分にとって不都合な点は隠して都合のいい点のみを強調し、受け手の記憶に残りやすいよう繰り返して、受け手側の批判力を麻痺させる。¹⁴⁾ また、送り手は自分の立場が受け手の立場と同じであることを示すことによって、受け手側から共感や安心感を引き出そうとする。¹⁵⁾

ヒトラーは自ら回顧しているように、第一次世界大戦時の「敵側のプロパガンダ方法から非常に多くのことを学んだ」。¹⁶⁾ 第一次世界大戦時に、

11) ジャウエット／オドンネル (1993) 『大衆操作』 4 頁参照。

12) プラトカニス／アロンソン (1998) 『プロパガンダ 広告・政治宣伝のからくりを見抜く』 10 頁。

13) ジャウエット／オドンネル (1993) 前掲書 7 頁。

14) 南博 (1958) 『社会心理学入門』 167-169 頁。

15) 川上和久 (1994) 『情報操作のトリック』 90 頁。

16) 『わが闘争 (上)』 254 頁。

飛行機による宣伝ビラ投下を行ったイギリス・アメリカのプロパガンダによって、ドイツ軍は戦意を失い、勝利の希望をなくしたドイツ軍の兵士が最後に反乱を起こし、ドイツ軍は自国領土に敵兵をほとんど入れないまま崩壊してしまっていたのだ。¹⁷⁾ ヒトラーはこの歴史的経緯からプロパガンダの技術を学び、『わが闘争』のなかでプロパガンダの基本原則を確立した。それは、抽象的な観念は避けてその代わりに感情に訴えること、伝えるべきメッセージを絞り込んでそれを絶えず繰り返し一面的・主観的に述べること、ステレオタイプの語句を用いて一つの具体的な敵を浮かび上がらせること等である。ヒトラーは、「最も簡単な概念を何千回もくりかえす」¹⁸⁾ ことの重要性を認識した。ヒトラーは言う：

どのプロパガンダも大衆的であるべきで、その知的水準は、プロパガンダの対象となる者たちの中で最も愚かな者の理解力に合わせるべきである。[...] プロパガンダの技術はまさしく、大衆の感情的な表象世界をつかんで、心理学的に適切な形式で大衆の注意をひき、さらにその心の中にはいり込むことにある。[...] 大衆の受容能力は非常に限られており、理解力は小さいが、そのかわりに忘却力は大きい。この事実からして、すべての効果的なプロパガンダは、ポイントをうんと制限して、そのことばで何を言おうとされているかを最後の一人が思いうかべることができるようになるまで、これらのポイントをスローガンのように役立てねばならない。¹⁹⁾

受け手の記憶に残りやすいように印象深く語る方法としては、レトリック（修辞法）がきわめて有効である。レトリックとは、「弁論によって人を説得する技術」²⁰⁾ である。レトリックは、古典的意味では法廷弁論、

17) プラトカニス／アロンソン（1998）、前掲書 290～301頁；ジャウエット／オドンネル（1993）前掲書 219～278頁；池田徳真（1981）『プロパガンダ戦史』41～57頁参照。

18) 『わが闘争（上）』266頁。

19) 『わが闘争（上）』259-260頁。

20) ルブール（2002）『レトリック』11頁。

政治弁論、賞賛弁論に適用されるものである。²¹⁾ その際弁論とは、ある主題に関して構成されたひとまとまりのテキストのことである。レトリックはふつう5つの部分からなり、それは弁論が生成される際に必ず経由する5つの段階である。まず話題となる素材の「発見」(inventio)、次に見いだされた素材の「配列」(dispositio)、第3番目に1つの文体として形づくる「表現法(修辭)」(elocutio)、次に表現の「記憶」(memoria)、そして最後に実際に口頭で表出する「演説法(発表)」(actioまたはpronuntiatio)である。²²⁾ 例えば16世紀英国のトマス・ウィルソンの『修辭学の技術』(1553年)でも述べられているように、「発見」と「配列」と「表現法」がきちんと行われていても、「演説法」が良くなければ、最終的に弁論が無意味になる²³⁾ :

公開の集会で意図するところを述べて称賛を勝ち取ろうと思う者は、まず出だしては、やや静かに話し、適度に休止を入れ、少し熱してくると、時と訴訟原因に最もふさわしく声をあげなければならない。²⁴⁾

首筋はまっすぐに伸ばし、額は皺をよせることなく、眉はひそめることなく、鼻はならずことなく、目は生き生きとして感じがよく、唇をひらいて空気にさらさず、歯は見せることなく、時と訴訟内容に最もふさわしく両腕はあまり開かず、程良くひろげる。²⁵⁾

この声と身ぶりに関わる「演説法」について、ヒトラーは申し分ない

21) 脇阪豊・川島淳夫・高橋由美子(編)(2002)『レトリック小辞典』145頁および、ルブール(2002)前掲書10頁参照。

22) 脇阪豊・川島淳夫・高橋由美子(編)(2002)前掲書28-29頁、68-69頁、112-114頁、およびルブール(2002)前掲書27-38頁参照。

23) ウィルソン(2002[1553])『修辭学の技術』21頁参照。

24) ウィルソン(2002[1553])前掲書264頁。

25) ウィルソン(2002[1553])前掲書266頁。

弁士であった。では、その「配列」と「表現法（修辞）」に関しては、ヒトラー演説をどのように分析できるのであろうか。

3. 1925年12月12日の演説内容

3. 1. 歴史的文脈

本稿で対象とする演説を分析するに際して、その歴史的文脈を明らかにしておく必要がある。

ヒトラーは、第1次世界大戦終結の翌年1919年にドイツ労働者党（ナチ党の前身）に入党したあと、1921年には党首に就任して党指導の全権を掌握した。1923年11月8日から9日に政権奪取をめざし、いわゆるミュンヘン一揆を起こしたが鎮圧され、その結果ナチ党は解散することとなり、ヒトラーは裁判を受ける身となった。しかし、法廷において自らに有利な雰囲気を作り上げることに成功したヒトラーには、1924年4月にこの反逆罪に対して寛大な刑罰が言い渡された。執行の半年後には残存刑期を保護観察期間とするという、禁固刑5年で済んだのだ。²⁶⁾ 獄中生活も待遇がよく、「面会人についても、ヒトラーの望み通り人数に制限なく、面会させるように」²⁷⁾ 取りはかられた。そのような環境のなか、1924年7月には獄中で私設秘書のルードルフ・ヘスらに『わが闘争』を口述で筆記させ始めた。そして同年12月20日には、刑期満了前に恩赦で出獄が許された。1925年2月26日には党機関誌『フェルクシヤー・ベオバハター』（Völkischer Beobachter）が復刊され、2月27日にはヒトラーは復帰後最初の演説をミュンヘンで「ドイツの将来とわれわれの運動」と題して行った。ここに「国民社会主義ドイツ労働者党」（NSDAP）が再結成され、合法的な政権獲得に向け運動が開始された。同年7月18日には、『わ

26) 阿部良男 (2001) 『ヒトラー全記録』109-111頁参照。

27) アイク (1986) 『ワイマル共和国史Ⅲ』242頁。

が闘争』第1巻が刊行された(第2巻刊行は翌1926年12月11日)。12月1日には「ロカルノ条約」がロンドンで正式調印され、ラインラントは連合国管理に移管された。

本稿で分析対象とする1925年12月12日の演説は、このような歴史的文脈のなかで行われたものである。阿部(2001)はヒトラーの年譜を「生成」(1889-1924)、「努力」(1925-1932)、「独裁」(1933-1938)、「成功」(1939-1940)、「破局」(1941-1945)の5つに区分しているが、この区分にしたがえば、われわれが分析する演説は第2の時期「努力」の始まりに位置する。ナチ党は、その後あらたに北部・西部ドイツに党勢を拡大することになる。1925年末の時点では27,000人であったナチ党員が、1926年に49,000人、1927年に72,000人、1928年に108,000人、1929年に178,000人となり、²⁸⁾ こうしてナチ党は経済恐慌が深刻化する中で1930年9月の総選挙で107議席を獲得し一躍第二党の地位に進出し、さらに1932年の選挙では230議席をとり第一党になった。²⁹⁾ そして1933年1月には、ヒトラーが首相となる。

3. 2. 演説文本文と日本語訳

さて、本稿で分析する1925年12月12日の演説は、ヒトラーがハーメルン近郊のディンゴルフィンゲン(Dingolfing)でのナチ党集会で行ったものである。これは3日後の12月15日に《Kurier für Niederbayern》紙に「ディンゴルフィンゲンでのアドルフ・ヒトラー」(Adolf Hitler in Dingolfing)として掲載され、Vollnhalsはこれを1925年2月から1933年1月までのヒトラーの演説・著述・指令を時代順に編集した刊行物の第1巻に第92番目の資料として採録している。³⁰⁾ 掲載論文の冒頭に、「ヒトラーはクリスマス

28) 『わが闘争(上)』の「解説」552頁を参照。

29) 政治宣伝としてヒトラーが模範としていたSPD(ドイツ社会民主党)が、ナチ党の政治宣伝を前に無力化していったプロセスについては、佐藤(1992)『大衆宣伝の神話 マルクスからヒトラーへのメディア史』229-299頁参照。

30) Vollnhals(Hrsg.)(1992): Hitler: Reden, Schriften, Anordnungen. Bd. 1., S. 237-238.

ス祭の意味について指摘を行った」とあるように、時期からして意識的にクリスマスと関連づけた演説である。

まず、その全文と日本語訳を示しておこう。テキスト構成が明確になるように4つの段落Ⅰ～Ⅳを区別し、各文は改行し①～④までの通し番号を付しておくことにする。

12. Dezember 1925 Rede auf NSDAP-Versammlung in Dingolfing

[I.]

①Die Zeit, in der sich das Ereignis abspielte, das wir zu Weihnachten feiern, trägt in vielem ähnliche Züge wie die heutige Zeit.

②Auch damals eine vom Judentum verseuchte materialistische Welt.

③Auch damals kam die Überwindung nicht von staatlichen Machtmitteln, sondern durch eine Heilslehre, deren Verkünder geboren wurde unter den erbärmlichsten Verhältnissen.

④Und doch feiern alle Menschen, die arischen Blutes sind, noch heute diese Geburt.

⑤Christus war arischen Blutes.

[II.]

⑥Wir haben auch heute wieder eine Periode, von Gift erzeugt und der Unfähigkeit, durch staatliche Machtmittel ihrer Herr zu werden.

⑦So treibt uns denn alle heute im Grunde genommen festester christlicher Glaube, wenn wir für eine Bewegung kämpfen, die die Menschen unseres Blutes aus dieser Welt des Materialismus befreien und ihnen den seelischen Frieden wieder geben will.

⑧Wir Nationalsozialisten sehen in dem Werke Christi die Möglichkeit, durch einen fanatischen Glauben das Ungeheuerlichste zu erreichen.

⑨Christus ist in einer verfaulten Welt erstanden, hat den Glauben gepredigt, zuerst verhöhnt, und doch ist aus diesem Glauben eine große

Weltbewegung geworden.

⑩Wir wollen das gleiche auf politischem Gebiete herbeiführen.

⑪Die eine Überzeugung darf jeder Nationalsozialist im Herzen tragen, wenn wir mit eiserner Energie, Beharrlichkeit und höchstem Glauben unser Werk durchführen, dann wird unser Werk von keiner irdischen Macht gebrochen werden können.

⑫Auch die Macht von Geld und Gold wird gebrochen werden, denn Gold ist nicht das höchste in der Welt.

[III.]

⑬Wir dürfen die Überzeugung haben, daß sich unsere Idee, wenn sie an sich richtig ist, durchsetzen wird.

⑭Und sie ist richtig und setzt sich durch.

⑮Das zeigt sich auch heute in Deutschland.

⑯Trotz aller Hemmungen und Verfolgungen, aller Verbote und aller Versuche, die Führer lahm zu legen, wächst die Bewegung dennoch ununterbrochen.

⑰Wer hätte noch vor 4-5 Jahren geahnt, daß sich die Bewegung selbst auf die kleinen Orte des Reiches ausdehnen würde.

⑱Wir müssen vor allem eingedenk sein des Satzes: *Der Wille ebnet den Weg.*

⑲Wenn uns jemand sagt, wir seien eine Konjunkturpartei, können wir getrost ja sagen.

⑳Der heutige Boden in Deutschland gibt den besten Boden für unsere Bewegung.

[IV.]

㉑Es mögen noch 20 oder 100 Jahre vergehen, ehe unsere Idee siegreich ist.

㉒Es mögen die, die heute an die Idee glauben, sterben, was bedeutet ein

Mensch in der Entwicklung eines Volkes, der Menschheit.

③ Es wird eine Zeit kommen, wo unsere Idee anerkannt sein wird.

④ Wir müssen daher den Kampf ausfechten, müssen ihn so ausfechten, daß spätere Generationen von uns sagen können, wir haben den Kampf richtig, nicht nur als Deutsche, sondern als Christen bestanden.

[日本語訳]

1925年12月12日、ディンゴルフィンクにおけるナチ党集会での演説

[I.]

①われわれがクリスマスのときに祝う出来事が実際に起こっていた時代は、多くの点で今日の時代とよく似た特徴を持っている。

②当時も、ユダヤ人氣質によって病んだ物質主義的な世界であった。

③当時も、困難が乗り越えられたのは、国家権力によってではなくて、最もあわれむべき状況下で生を受けた人物が告知した救済の教えによってであった。

④そして、アーリアの血を持つ人々はすべて、今日もなおこの人物の誕生を祝っている。

⑤キリストは、アーリアの血をもっていたのだ。

[II.]

⑥われわれはまた今日ふたたび、毒によって生み出された時代、国家権力を通じて [自らが] 時代の主になることが不可能となった時代を迎えている。

⑦われわれと同じ血をもつ人々をこの物質主義の世界から解放し、彼らに再び魂の平和を与えようとする運動のためにわれわれが戦うとき、われわれはみな根本において最も堅いキリスト教的信仰によって駆り立てられているのである。

⑧われわれ国民社会主義者たちは、キリストの成した業のなかに、熱狂的な信仰を通して最も途方もないことを達成する可能性を見て取る。

- ⑨キリストはすなわち、腐敗した世界のなかで立ち上がり、信仰を説き、初めはあざけられたが、この信仰が大きな世界的運動となった。
- ⑩われわれは同じことを、政治の領域でもたらしたいと思う。
- ⑪どの国民社会主義者も、心にひとつの確信をもっておいてよかろう。もしわれわれが鉄のような精力と粘り強さと最高の信仰をもってわれわれの業を実行するならば、われわれの業はいかなる現世の権力によっても打ち破られることはできないであろうと。
- ⑫〔他方で〕お金と黄金の力ですら、打ち破られることになるであろう。というのも、黄金は世界における最高のものではないから。

〔III.〕

- ⑬われわれは、われわれの理念が、もしそれが正しいのならば、普及するであろうことを確信してかまわない。
- ⑭実際われわれの理念は正しいのであり、普及するのである。
- ⑮そのことは、今日でもドイツにおいて明らかである。
- ⑯あらゆる妨害、あらゆる迫害、あらゆる禁止、そして指導者たちを倒して麻痺させようとするあらゆる試みにもかかわらず、この運動は中断されることなく伸びている。
- ⑰4・5年前に誰がいったい、この運動が帝国の小さな街々にまで広がると予感したであろうか。
- ⑱われわれはとりわけ、「意志が道を平坦にする」ということばを肝に銘じておかねばならない。
- ⑲もしだれかがわれわれのことを時勢に乗じた党であると言うならば、われわれは悠然と、しかり (Ja) と言うことができる。
- ⑳今日のドイツの土壤は、われわれの運動にとって最も良い土壤を与えている。

〔IV.〕

- ㉑われわれの理念が勝利するのに、まだ20年または100年かかるかもしれない。

②この理念を今日信仰している人々は、死んでしまっているかもしれないが、民族、人類の発展において一個人は何の意味があるというのか。

③われわれの理念が認められるであろう時代が、来るであろう。

④したがって、われわれは戦いに決着をつけねばならない。われわれはドイツ人としてだけではなくて、キリスト者としても正しく戦いに勝ったのだと、後代のひとたちがわれわれについて言うことができるように、戦いに決着をつけねばならないのである。

4. 演説文の分析

4.1. テキスト構成

まず、演説の「配列」(dispositio)、すなわちテキスト構成を見てみよう。レトリックの第2の部門である「配列」によれば、弁論は「序論」(exordium)、「陳述」(narratio)、「論証」(argumentatio)、「結論」(conclusio)の4つの構成要素からなる。この演説の4つの段落を、実際にちょうど「序論」—「陳述」—「論証」—「結論」に当ててみるのが可能である。³¹⁾ その際、各段落の核心をなす内容は次のようである：

第Ⅰ段落：序論

「最もあわれむべき状況下で生を受けた人物が告知した救済の教え」(③)により困難が過去において克服されたこと、

第Ⅱ段落：陳述

「われわれは同じことを、政治の領域でもたらしたいと思う」(⑩)こと、

第Ⅲ段落：論証

31) Sluzalek (1987): Die Funktion der Rede im Faschismus, S. 61-81に、弁論の配列の視点からの分析の試みが見られる。

「今日のドイツの土壤は、われわれの運動にとって最も良い土壤を与えている」(20) こと、

第Ⅳ段落：結論

「われわれの理念が認められるであろう時代が来るであろう」(23) こと。

別の観点から見ると、演説全体のテキスト構成としては、第Ⅰ段落で《過去》との平行性が指摘されキリストとヒトラーが結びつけられ、続く第Ⅱ段落と第Ⅲ段落で《現在》の状況と信念の正当性が述べられ、最後の第Ⅳ段落で運動貫徹の《未来》の予言ないし約束が行われ、「キリスト者として」の運動への参加が促されている。過去—現在—未来という時間の流れに沿った提示の仕方は、聴衆に理解しやすいものであるといえよう。³²⁾ そのなかでheute「今日」という語が、この過去—現在—未来という3つの構成部分のいずれにおいても用いられているのは偶然ではないであろう(①、④、⑥、⑮、⑳、㉔)。時間の座標軸上の「今日」という原点が、つねに演説構成の出発点にある。第Ⅰ段落では過去と現在が交差するように交互に示され、批判的にとらえ直す余裕を与えない。引き続き、「表現法」(elocutio)の観点で演説を分析してみよう。

4.2. 白と黒のラベル

1980年代に社会心理学者ヘンリー・タジフェル(Henry Tajfel)が行った実験によれば、初対面の人たちをコイン投げによって集団Xと集団Wとに分けたとき、本来はランダムにすぎないはずのラベルを共有する人同士(集団Xと集団W)はお互いに好感をもち、親友であるかのように振る

32) 岡部朗一(1994)『大統領の説得術人を動かすレトリック』80頁によれば、この過去—現在—未来の示し方は歴代のアメリカ大統領の演説にも見られる。

舞い、さらにはラベルの共有者たちのほうがラベルを共有しない人たちよりも望ましい性格と能力を持っていると評定したという。³³⁾「われわれ—かれら、黒—白、裕福—貧乏、自由—ソビエト、男—女のように対象を『二分する』名詞は、世界をきちんとした小さなパッケージに分け、とるべき行為の適切な範囲を示してくれる」³⁴⁾のである。われわれが現実に対して行うラベル付けが実際にそのような現実を作り出し、名が実体を作る。物事を2つに分ける見方に関して、ヒトラーは『わが闘争』のなかで次のように述べている：

民衆の感情は複雑でなく、非常に単純で閉鎖的である。この場合あまり細かな区別はなされず、肯定か否定か、愛か憎か、正か不正か、真か偽かであり、決して半分はそうで半分は違うとか、あるいは一部分はそうだがなどということはない。³⁵⁾

味方と敵という2分法は、本稿の対象とする演説全体を通してみると、次のような表現で際だたされていることに気づく：

味方：*wir/ unser/ uns*「われわれ」(①、⑥、⑦など)、*Nationalsozialisten*「国民社会主義者たち」(⑧)、*arisch*「アーリアの」(④、⑤)、*Christen*「キリスト者」(⑭)。

敵：*Judentum*「ユダヤ人気質」(②)、*materialistische Welt*「物質主義的な世界」(②)、*Welt des Materialismus*「物質主義の世界」(⑦)、*staatliche Machtmittel*「国家権力」(⑥)、*verfaulte Welt*「腐敗した世界」(⑨)、*irdische Macht*「現世の権力」(⑪)、*Macht von Geld und Gold*「お金と黄金の力」(⑫)。

ここでは、敵対的なあり方がユダヤ人に代表される資本主義・金銭欲

33) プラトカニス／アロンソン 前掲書 193-194頁参照。

34) プラトカニス／アロンソン 前掲書 54頁。

35) 『わが闘争(上)』264頁。

として表現されている。³⁶⁾ バーク (1987) によれば、ブルジョアジーの心のなかには金銭崇拜とその崇拜に対する自己嫌悪という矛盾する二つの衝動があるが、ブルジョアジーは『『悪い』面は『悪魔』に肩代わりさせて…悪魔の陣営は悪い資本主義の手先と考えることで自尊心を回復する』³⁷⁾ ことができる。またそもそも共通点を持たない大衆は、「共通の敵を設定することではじめて統一が保たれ」、³⁸⁾ 「悪役を仕立てあげ、それを商業広告と同じやり方で執拗に繰り返すことで次第に本物らしくする」³⁹⁾ ことが可能となる。「国家権力によってではなくて、…救済の教えによって」(③) という表現のように、2者を対照法 (Antithese) 的に並べる、nicht A, sondern Bという二者択一の形式は、受け手にとって選択肢が多数示されるよりもわかりやすく、選択を「一義的に強制」⁴⁰⁾ している。

味方陣営を「われわれ」で包括する語り方は、グランフェルーン・テクニック⁴¹⁾ と呼ばれる。連帯感の形成による説得戦術である。プロパガンダは「同質の価値観と心性が既に存在している場合に、最も効果を発揮」⁴²⁾ する。ヒトラーの演説では、語り手が聴衆と一体化して、全員を動員する1人称複数形 *wir*, *unser*, *uns* 「われわれ」が多用されていて (①、⑥、⑦など合計21回)、*ich* 「わたし」は一度も用いられていない。聴衆はヒトラーの意見に無意識のうちに同調し、「多くの階層の人びとが自分に語りかけられているかのように感じ、⁴³⁾ *wir*以外のものは敵であると考え」ように誘導され、「大勢に便乗」⁴⁴⁾ していく。「誰でも一少なくともわ

36) Straßner (1987): *Ideologie – SPRACHE – Politik. Grundfragen ihres Zusammenhangs*, S. 171の表現を借りると、「民衆のなかで攻撃性と嫌悪感が解放されるようにと、『資本』と『金融』の領域はとりわけネガティブなものへと形が変えられた。」

37) バーク (1994) 「ヒトラーの『我が闘争』における修辞」355頁。

38) バーク (1994) 前掲書 352頁。39) バーク (1994) 前掲書 374頁。

40) 宮田光雄 (1991) 『ナチ・ドイツの精神構造』147頁。

41) プラトカニス／アロンソン (1998) 前掲書 193-201頁参照。

42) ケルショー (1993) 『ヒトラー神話 第三帝国の虚像と実像』6頁。

43) 宮田光雄 前掲書 148頁。

44) ジャウエット／オドンネル (1993) 前掲書 256頁。

れわれはみんな—」そう思っているのだ。フランスの社会学者、ガブリエル・タルド (Gabriel Tarde) は、大衆を互いに結びつけるメカニズム、大衆を心理的な群集たらしめるメカニズムを「模倣」と表現し、人がなかば無意識のうちにこなう模倣を「非論理的な模倣」と呼んだ。⁴⁵⁾ このようにして大衆は「暗示」を受けていく。

演説の最後のほうで修辞疑問文が2度用いられているが、聴衆に語りかける修辞疑問は、聴衆との心的距離を縮めるのに役立っている：①*Wer hätte noch vor 45 Jahren geahnt, daß sich die Bewegung selbst auf die kleinen Orte des Reiches ausdehnen würde.* 「4・5年前に誰がいったい、この運動が帝国の小さな街々にまで広がると予感したであろうか。」；②*Es mögen die, die heute an die Idee glauben, sterben, was bedeutet ein Mensch in der Entwicklung eines Volkes, der Menschheit.* 「この理念を今日信仰している人々は、死んでしまっているかもしれないが、一民族、人類の発展において一個人は何の意味があるというのか。」

4. 3. 意味と判断の幻惑

4. 3. 1. メタファー

敵に対して用いられた一連の生物学的メタファーは、意味をとりわけ病理の領域へ転写して受け手の理性を幻惑する手段となっている：*eine vom Judentum verseuchte materialistische Welt* 「ユダヤ人気質によって病んだ物質主義的世界」(②)、*eine Periode, von Gift erzeugt* 「毒によって生み出された時代」(⑥)、*in einer verfaulten Welt* 「腐敗した世界のなかで」(⑨)、*die Führer lahm legen* 「指導者たちを倒して麻痺させる」(⑩)。これらの「恐怖アピール」⁴⁶⁾によってひとは一般的に、「当面の問題を注意

45) 若田恭二 (1995) 前掲書 131~140頁。

46) プラトカニス/アロンソン (1998) 前掲書 185頁。

深く考えなくなり、恐怖から逃れる道を一生懸命に探すようになる」。⁴⁷⁾ ヒトラーは、「現在のドイツ」の窮状をすべて「敵」に責任転嫁するが、その際に好んで用いられるのがこの生物学的メタファーである。「アーリアの血」(④、⑤)、「われわれと同じ血」(⑦)のように人種的差別化を主張する *Blut* 「血」という語に関連して、興味深いことが観察される。Schmitz-Berning (2000) によれば、*Blut und Boden* 「血と土」というスローガンが「宗教儀式的なシンボルという地位をもつ国民社会主義のキーワードになったのは、1930年に出された(後年の帝国農業総統兼帝国大臣の) R. Walter Darréの主著『血と土からの新貴族』によってである」。⁴⁸⁾ そうだとすれば、そのすでに5年前の1925年にこの演説のなかで、*Blut* と *Boden* とが *und* による結合ではないにしても、同じテキストに同居しているのである。

4. 3. 2. 誇張法

意味の修辞に関して、この演説全体において誇張法 (Hyperbel) が多くあるのに気づく。それは、*erbärmlichst* (③)、*ungeheuerlichst* (⑧)、*höchst* (⑪、⑫)、*best* (⑳) という最上級表現の多用だけでなく、あたかも例外がないかのように聴衆と現実を包み込む総称的不定代名詞 *alle* 「すべての」と *jeder* 「どの～も」(*alle Menschen*: ④、*alle*: ⑦、*alle Hemmungen und Verfolgungen, alle Verbote und alle Versuche*: ⑯、*jeder Nationalsozialist*: ⑪) に確認できる。これらの誇張法もまた、聴衆の冷静な判断を阻んでいる。*ungeheuerlich* 「とてつもない」(⑧) と *fanatisch* 「熱狂的に」(⑧) という語はそれ自体がすでに、誇張法的であると言える。*fanatisch* という語をクレムペラーは「第三帝国の全時期を通じて最上級の評価を与える形容詞」⁴⁹⁾ と称している。この語は、「勇敢なとか、

47) プラトカニス／アロンソン (1998) 前掲書 186頁。

48) Schmitz-Berning (2000): *Vokabular des Nationalsozialismus*, S. 111.

49) クレムペラー 86頁。

献身的なとか、忍耐強いという概念を極度に高めた意味内容の言葉、もっと正確に言えば、こうした美德を一切切みごとに溶かし込んだ総合的な言葉⁵⁰⁾であった。Schmitz-Berning (2000)によれば、*fanatisch*という語はすでに1923年のヒトラー演説を案内するポスターに書かれていたという。⁵¹⁾ 数え上げてみると、『わが闘争 第1巻』(1925年7月刊行)では13回、『わが闘争 第2巻』(1926年12月刊行)では14回使用されている。本稿で対象としたもの以前の演説では、1925年2月27日に復帰後最初の演説(ミュンヘンでのナチ党集会)で「熱狂的な信仰と熱狂的な確信」が言及され、⁵²⁾ 7月8日のシュトゥットガルトでのナチ党集会で「熱狂的な社会主義者、熱狂的な国民主義者」⁵³⁾ が言及され、10月8日のヴィスマールでのナチ党集会で「熱狂的な社会的正義感、熱狂的な国民的意義」⁵⁴⁾ が言及され、11月4日のブラウンシュヴァイクでのナチ党集会で「熱狂的な意志、人権のために熱狂的に戦う」⁵⁵⁾ ことが口にされ、同日の別のブラウンシュヴァイクでのナチ党集会でも「熱狂的な意志、熱狂的な情熱性、熱狂的な確信」⁵⁶⁾ が語られ、11月24日のアンスバッハの

50) クレムペラー 86頁。またWells (1990), S. 443, Minnertrup (1989), S. 205を参照。

51) Schmitz-Berning (2000) : a.a.0, S. 227.

52) „Denn der Schlüssel zum Herzen des Volkes heißt nicht Bitte, sondern Kraft. So fehlt ihm jene Macht, die allein die Masse eines Volkes zu erfassen vermag, nämlich der fanatische Glaube und die fanatische Überzeugung, der rücksichtslose Kampf für ein Ideal, und vor

allem eines, die Erkenntnis, daß, wenn man etwas Rechtes erreichen will, die Pflicht einem gebietet, jedes Mittel dafür einzusetzen.“ (Vollnhals [Hrsg.] 1992, S. 18).

53) „Wir sind fanatische Sozialisten und ebenso treue Söhne unseres Volkes, wir sind fanatische Nationalisten und ebenso treue Sozialisten!“ (Vollnhals [Hrsg.] 1992, S. 112).

54) „Es gibt kein Nationalgefühl ohne ein fanatisches soziales Gerechtigkeitsgefühl./ Höchste soziale Gerechtigkeit und fanatischer nationaler Sinn sind identisch.“ (Vollnhals [Hrsg.] 1992, S. 173).

55) „Die größten Umwälzungen sind massensuggestive eruptive Evolutionen [sic!] der Volkseele gewesen, nicht abstrakte Geistigkeit und verstandesmäßige Erkenntnis haben die Völker freigemacht, sondern der blinde Glaube von Millionen und der fanatische Wille von Millionen./ Wir kämpfen fanatisch für die Rechte der Menschen./ Darum wollen wir das Volk aufwecken und ihm diese Kraft geben: den fanatischen Willen und den heiligen Glauben!“ (Vollnhals [Hrsg.] 1992, S. 209f.).

56) „Die Voraussetzungen dazu liegen nicht in der Erkenntnis verstandesmäßiger Dinge,

ナチ党集会では「熱狂的な自由愛」⁵⁷⁾が語られている。これらの用例を含めて、この演説（1925年12月12日）における*fanatisch*の使用はもっとも初期に属する使用である。今の例で「熱狂的な意志」という表現が何度も見られたことからしても、①にある*mit eiserner Energie*「鉄の精力を持って」のなかの*eisern*も誇張表現と言えよう。これらは、「どんな場合でも人を欺き感性を麻痺させようとしてはばからない。」⁵⁸⁾

4. 3. 3. 断定的主張

さらには次のような、根拠が示されない断定的主張も、誇大に表現する手法に数え入れることができよう：*Christus war arischen Blutes*. 「キリストは、アーリアの血をもっていた。」(⑤)；*Und sie ist richtig und setzt sich durch*. 「実際それは正しいのであり、普及するのである。」(⑭)；*Der heutige Boden in Deutschland gibt den besten Boden für unsere Bewegung*. 「今日のドイツの土壤は、われわれの運動にとって最も良い土壤を与えている。」(⑳)；*Es wird eine Zeit kommen, wo unsere Idee anerkannt sein wird*. 「われわれの理念が認められるであろう時代が来るであろう。」(㉓)。最後の例は、予言となっている。『わが闘争』のなかでヒトラーが「主観的一方的な態度」⁵⁹⁾を要求している通りである。断言は、「それを発する人に権威を与え、それを聞く人びとを信奉者に変え」⁶⁰⁾る。

sondern vielmehr im blinden Glauben und fanatischen Wollen./ Gehen Sie zurück in irgendeine große Epoche der Menschheit: Reformation, Revolution, Freiheitskämpfe, immer sind die großen Triebkräfte die fanatische Leidenschaftlichkeit und der blinde Glaube./ Diese Bewegung wird nicht durch schwankende wissenschaftliche Erkenntnis herbeigeführt, sondern ist erfüllt von fanatischer Überzeugung des eigenen Rechtes und blindem Glauben und eisernem Wollen./ Es ist eine Hölle geworden. Aber die Masse glaubte damals an ihr Programm und hatte den fanatischen Willen, es durchzusetzen.“ (Vollnhals [Hrsg.] 1992, S. 212f).

57) „Stein wußte aber, daß zu einer fanatischen Freiheitsliebe auch die unbedingte Verpflichtung zu sozialer Gerechtigkeit gehöre.“ (Vollnhals [Hrsg.] 1992, S. 218).

58) クレムペラー (1974) 前掲書 314頁。

59) 『わが闘争 (上)』 262頁。

60) 若田恭二 (1995) 前掲書 146頁。

4. 3. 4. 仮想を実現する構文

演説者ヒトラーが聴衆に対して語るなかで、4度も *wenn...* という仮定表現が用いられていることは際だったことである (⑦、⑪、⑬、⑰)。「われわれが最も堅いキリスト教的信仰によって駆り立てられ」るのは、「われわれと同じ血をもつ人々をこの物質主義の世界から解放し、彼らに再び魂の平和を与えようとする運動のためにわれわれが戦うとき」(⑦)であり、「われわれの業はいかなる現世の権力によっても打ち破られることはできない」のは、「もしわれわれが鉄のような精力と粘り強さと最高の信仰をもってわれわれの業を実行するならば」の話であり (⑪)、「われわれの理念が普及するであろうことを確信してかまわない」のは、「もしそれが正しいのならば」という前提でのことである (⑬)。仮定部の *wenn* によって独断的に可能性が仮定される、ないし前提され、推定部には都合のいい論の展開が行われる。一方的主張をするのに適した表現形式のひとつである。最後の例の「もしだれかがわれわれのことを時勢に乗じた党であると言うならば、われわれは悠然と、しかり (Ja) とすることができる」は、相手からの反論を予期して先取りして述べて、反論をあらかじめ反駁しておくという予弁法 (Prolepse) として機能している。

4. 3. 5. 冗語法

クレムベラーの観察によると、*Welt* 「世界」という語はナチズムにおいては「最上級を意味する前つづりとして、至るところで」⁶¹⁾ 用いられていた。*Weltbewegung* 「世界的運動」という表現がすでに大きな運動であることを内包しているはずであるにもかかわらず、⑨で *große Welt-(bewegung)* のように「大きな世界的」と表現されているのは、冗語法 (Pleonasmus)

61) クレムベラー (1974) 前掲書 320頁。

的表現である。この冗語法も最終的には表現の誇大化に役立ち、聴衆の不信感を見事に予防している。

4. 3. 6. 曖昧表現

誇張法と一見したところ対照をなすが、結果として同じく意味を聴衆を幻惑する表現として、in vielem「多くの点で」(①)、im Grunde genommen「根本において」(⑦)、das gleiche「同じこと」(⑩)という曖昧表現を挙げることができる。(Es mögen noch) 20 oder 100 Jahre (vergehen)「(まだ) 20年または100年 (かかるかもしれない)」(⑳)という幅の広すぎる時間規定も、まさに曖昧きわまりない表現である。これらは漠然としすぎていて、聴衆として反論の余地がない。⁶²⁾ また、Frieden「平和」(⑦)、Überzeugung「確信」(⑪, ⑬)、Wille「意志」(⑱)、Idee「理念」(㉑, ㉒, ㉓)、そしてEntwicklung「発展」(㉔)等の、だれにもポジティブに聞こえるが具体的内容に乏しい抽象名詞も、この系列に入る。その中に入れられる内容がイデオロギーによって大きく異なりえるという点では、「イデオロギー的多義」⁶³⁾があると言える。(疑似)宗教性を帯びたHeil (lehre)「救済 (の教え)」(③)、Glaube「信仰」(⑦, ⑧, ⑨, ⑪)も同様に指す内容が曖昧であるが、ナチズムを神聖化するのに役立っている。また、とりわけ当時は、大戦の敗退と苦難のなかでドイツ人の名誉心・自信を回復してくれる「救済者」を大衆が待望していたことからして、この演説でくり返し言及されるChristという語は、ヒトラーをキリストと同一視させる目的を持っていると解釈するべきであろう。⁶⁴⁾

62) 田野大輔 (2003) 前掲論文によれば、例えばVolksgemeinschaft「民族共同体」という理念自体も曖昧であり、「目標を明確にしまうと、潜在的な支持者が失われるだけでなく、異議を唱える者がでてくる可能性もあった」(田野 2003, 188頁) ので意図的に曖昧であったという。

63) Burkhardt (2001): „Politische Sprache. Grundbegriffe und Analysemethoden“, S. 4.

64) 宮田光雄 (1991) 前掲書 189頁参照。

4.3.7. 話法の助動詞

また意味内容の主観性という点で興味深いのは、話者の主観的判断を表す「～にちがいない」、「～であろう」、「～してもよい」等の、話法の助動詞（未来形を含む）の使用である。この話法性（Modalität）ないし法性（modality）は、語り手と受け手のあいだの「対人関係」を反映し、「その陳述に限定が加われば加わるほど、あるいは価値判断の入ったものになればなるほど、語り手の人格から来る意味がますます伝達され、含意された《受信者》に対する意識がますます強くなる」。⁶⁵⁾ ヒトラーの演説では、中盤から話法の助動詞がはじめて（⑦）*will* 「（平和を与え）ようとする（運動）」、⑩ *wollen* 「（われわれはもたらし）たいと思う」、⑪ *wird* 「（われわれの業は打ち破られることはできない）であろう」、終盤に入ってから⑬での *dürfen* 「（われわれは確信）してもかまわない」と *wird* 「（われわれの理念が普及する）であろう」を経て、最後の⑱以降⑳までに、*müssen* 「（われわれは肝に銘じておかねばならない）（⑱）」、*können* 「（われわれは言うことが）できる」（⑲）」、*mögen* 「（20年または100年かかる）かもしれない」（㉑）」、*mögen* 「（人々は、死んでしまっている）かもしれない」（㉒）」、*wird* 「（われわれの理念が認められる）であろう」（㉓）」、*wird* 「（時代が来る）であろう」（㉔）」、*müssen* 「（われわれは決着を付けねばならない）（㉔）」、*müssen* 「（われわれは決着を付けねばならない）（㉔）」、*können* 「（後代のひとたちが言うことが）できる」（㉔）」、という具合に、真偽判断と価値判断のモダリティーの助動詞がマシンガンのように発せられている。最後の *müssen* によっては、受け手に反論を許さない自信に満ちた命令という行為が行われている。これらの話法の助動詞の主語となっているのは、ほとんどが語り手と受け手とを一体化させた1人称

65) ウェールズ (2000) : 『英語文体辞典』303頁。政治家の発言の話法性が政治家の「責任」と関わることについては、鈴木佑治 (1999) 「日米の政治言説と誤解のメカニズム」を参照。

複数の「われわれは／われわれの」である。

4.4. 繰り返される音調

この演説のなかには、繰り返されることばのファンファーレが聞こえる。②と③はともに *Auch damals* 「当時も」で始まり、首語句反復 (Anaphora) が行われている。同様に①と②の冒頭では *Es mögen* 「かもしれない」が繰り返されている。④では *ausfechten* が尾語句反復 (Epiphora) されている。また①と②にも、*gebrochen werden* 「打ち破られる」がほぼ尾語句反復的に見られる。同じ音調、同種の音調のくり返しは、聞き手の思考、反省する力を抑圧し、そして繰り返された言葉は全体から独立しスローガン化していく。⁶⁶⁾ ⑬の冒頭の *Trotz aller Hemmungen und Verfolgungen, aller Verbote und aller Versuche* では、*trotz aller Ver-* という同じことばないし音声単に繰り返されているだけでなく、*Hemmungen* 「妨害」、*Verfolgungen* 「迫害」、*Verbote* 「禁止」という類義語が連続することで、一種の累積法 (Akkumulation) 的効果が生み出されている。

同じ音が語頭に使用される頭韻法が、⑫の *Geld und Gold* 「お金と黄金」に見いだされるのは明らかであろう。しかしさらに詳細に観察すると、⑦において *w* で始まる語が頻出していることに気づく：

[...] wenn wir für eine Bewegung kämpfen, die die Menschen unseres Blutes aus dieser Welt des Materialismus befreien und ihnen den see-lischen Frieden wieder geben will.

これは、この演説の最大のキーワードである *Bewegung* 「(ナチ) 運動」におけるアクセントを持つ音節の子音 *w* を耳に印象づけるために意図的に繰り返されていると解釈することが可能であろう。この *w* という子音は、17世紀末のライプニッツの指摘にもあるとおり、⁶⁷⁾ まさに運動を表す音象

66) 宮田光雄 (1991) 前掲書 142頁参照。

67) ライプニッツ『ドイツ語の鍛錬と改良に関する私見』(1697頃執筆)の§49には次

徴性を有する。w音については、さらにまた ⑬ *Der Wille ebnet den Weg*. のなかにも頭韻としてのくり返しを確認できる。

⑬と⑭には、A/B, B/Aという型の交差法 (Chiasmus) 的構造が2組 (*richtig – ist/ ist – richtig*と*durchsetzen/ setzt durch*) 見て取れ、しかもその2組がそれはそれでまた (A) / (B), (A) / (B) のように平行法 (Parallelismus) 的配置となっている。これは、構文のくり返しのヴァリエーションと把握することができる：

[...] wenn sie an sich richtig ist, durch setzen wird.

 A B
 A B

(A)
(B)

Und sie ist richtig und setzt sich durch.

 B A
 B A

(A)
(B)

5. 結び

以上のように、聴衆にとって受け入れやすいテキスト構成をしている1925年12月12日のヒトラー演説からは、仮想を実体化させ、また意味を

のようにある：「例えば、ドイツ語の *Welt* 「世界」という単語が何を意味しているのかを問う場合、昔の書物や歌のなかに見られるとおり、われわれの祖先が *Werelt* と言ったことを思い起こさねばならない。それによって、その単語がまさに大地のまわり (つまり *Orbis terrarum*) を表していたことがわかる。というのも、*Wirren* 「ゴタゴタ、紛争」、*Werre* 「ケラ (虫)」（英語では *Wire*、ギリシャ語では *Gyrus* という）は、円のまわりを回るものを意味するからである。その語根は、離れては近づきまたまたまわりを回るような運動を伴う *W* というドイツ語の文字 [= 音声] のなかにある。例えば、*wehen* 「風が吹く」、*Wind* 「風」、*Waage* 「天秤」、*Wogen* 「大波」、*Wellen* 「波」、*Wheel* 「輪」の場合がそうである。」(『ライプニッツの国語論』(2006)。また *W. フンボルト* にも、*W* という音は「揺れ動いて安定せず、我々の感官の前で明瞭な形を取らずに右へ左へ乱れるような動き」(フンボルト『言語と精神』122頁) を表すという観察がなされている (『ライプニッツの国語論』(2006)、「解説」の第5章を参照)。

幻惑するような語、表現、構文が見て取れ、音調の繰り返しが聞こえてくる。各行に、いや数語ごとに、なんらかの「仕掛け」が用意されているのだ。これらの「仕掛け」を駆使して、ヒトラーは支持者と党員の獲得・党勢拡大という戦いに「決着をつける」ことを誓い求める。ヒトラーが演説の1年後に刊行した『わが闘争』第2巻で「支持者を募ること」⁶⁸⁾をプロパガンダの明確な目的としているとおり、まさにこの時期には党勢拡大が至上課題であった。

しかし政権獲得(1933年1月)後には、新たな支持者の獲得だけでなく、「すでに獲得された人々の固定化と道徳的強化」⁶⁹⁾もナチ党大会の意義と目的となった。これに対応して演説の目的が時代とともに変化していったとすれば、演説の方法も時代によって異なっていた可能性がある。ナチズムにおいては意味内容をカムフラージュする目的で学問的響きをもつ外来語が多用されたことがよく指摘されるが、⁷⁰⁾本稿で分析した演説には *materialistisch* 「物質主義的」(②), *Materialismus* 「物質主義」(⑦), *Konjunktur* 「景気」(⑱) くらいしか外来語が見あたらない。外来語の多用は、もう少しあとになってから顕著になった傾向なのかもしれない。同様にナチ言語の特徴とされる略記法(KL, HJなど)も、この演説には見られない。このような時期による演説の傾向性の違いについては、筆者の今後の研究課題のひとつとしたい。

参考文献

- 阿部良男(2001) 『ヒトラー全記録 20645日の軌跡』 柏書房。
 Beck, Hans-Rainer (2001) : Politische Rede als Interaktionsgefüge: Der Fall Hitler. (Tübingen)
 バーク、ケネス(1994) [Burke, Kenneth] 「ヒトラーの『我が闘争』にお

68) 『わが闘争(下)』292頁。

69) 田野大輔(2003) 前掲論文 194頁。

70) Kükelhahn(1983): „Sprache als Werkzeug politischer Verführung“, S. 32; 宮田光雄(1991) 前掲書 174-175頁参照。

- ける修辞』、『象徴と社会』森常治訳 法政大学出版局、350-376頁。〔論文初出：1939年〕
- Burkhardt, Armin (2001) : „Politische Sprache. Grundbegriffe und Analysemethoden“. 『独逸文学』(関西大学独逸文学会)、第45号、1-32頁。
- アイク、エーリッヒ (1986) [Eyck, Erich] 『ワイマル共和国史 III 1926～1931』 救仁郷繁訳 ペリカン社。〔原書：1959年〕
- 藤竹暁 (2002) 『ワイドショー政治は日本を救えるか テレビの中の仮想政治劇』 ベスト新書。
- 平井正 (1995) 『20世紀の権力とメディア ナチ・統制・プロパガンダ』 雄山閣出版。
- ヒトラー、アドルフ (1973) [Hitler, Adolf] 『わが闘争 完訳 (上) (下)』 平野一郎・将積茂訳 角川書店。〔原書：1925年、1926年〕
- 池田徳眞 (1981) 『プロパガンダ戦史』中央公論社。
- グラザー、ヘルマン (1987) [Glaser, Hermann] 『ヒトラーとナチス 第三帝国の思想と行動』 関楠生訳 社会思想社。〔原書：1961年〕
- フンボルト、ヴィルヘルム・フォン (1984) [Humboldt, Wilhelm von] : 『言語と精神 カヴィ語研究序説』 亀山健吉訳 法政大学出版局。
- ジャウエット、ガース・S/ ビクトリア・オドンネル (1993) [Jowett, Garth/ Victoria O'Donnell] 『大衆操作』 松尾光晏訳 ジャパン・タイムズ。〔原書：1992年〕
- 川上和久 (1994) 『情報操作のトリック その歴史と方法』 講談社。
- ケンボウスキー、ワルター (編) (1973) [Kempowski, Walter] 『君はヒトラーを見たか 同時代人の証言としてのヒトラー体験』 到津十三男訳 サイマル出版会。〔原書：1973年〕
- ケルショー、イアン (1993) [Kershaw, Ian] 『ヒトラー神話 第三帝国の虚像と実像』 柴田敬二訳 刀水書房。〔原書：1987年〕
- クレムペラー、ヴィクトール (1974) [Klemperer, Victor] 『第三帝国の言語 <LTI> ある言語学者のノート』 羽田洋ほか訳 法政大学出版

- 局。[原書：1947年。]
- Kükelhahn, Kurt (1983) : „Sprache als Werkzeug politischer Verführung.“
In: Muttersprache 93, S. 31-34.
- ライプニッツ、ゴットフリート・ヴィルヘルム (2006) [Leibniz, Gottfried Wilhelm] 『ライプニッツの国語論』 高田博行・渡辺学訳 法政大学出版局。
- 南博 (1958) 『社会心理学入門』 岩波書店。
- Minnerup, Willi (1989) : „Pressesprache und Machtergreifung am Beispiel der Berliner Germania.“ In: Konrad Ehlich (Hrsg.) : Sprache im Faschismus. (Frankfurt am Main) S. 198-236.
- 宮田光雄 (1991) 『ナチ・ドイツの精神構造』 岩波書店。
- 宮田光雄 (2002) 『ナチ・ドイツと言語 ヒトラー演説から民衆の夢まで』 岩波新書 (新赤版) 792.
- ミュンツェンベルク、ヴィリー (1995) [Münzenberg, Willi] 『武器としての宣伝』 星乃治彦訳 柏書房。 [原書：1937年]
- 岡部朗一 (1994) 『大統領の説得術 人を動かすレトリック』 大進堂。
- オーウェル、ジョージ (1972) [Orwell, Georg] 『1984年』 新庄哲夫訳 ハヤカワ文庫 [原書：1949年]
- ポイカート、デトレフ (1991) [Peukert, Detlev] 『ナチス・ドイツ—ある近代の社会史—』 木村靖二・山本秀行訳 三元社。 [原書：1982年]
- プラトカニス、アンソニー／エリオット、アロンソン (1998) [Pratkanis, Anthony R./Elliot, Aronson] 『プロパガンダ 広告・政治宣伝のからくりを見抜く』 社会行動研究会訳 誠信書房。
- Polenz, Peter von (1999) : Deutsche Sprachgeschichte vom Spätmittelalter bis zur Gegenwart. Band III. 19. und 20. Jahrhundert (Berlin/New York)
- ルブール、オリヴィエ (2002) [Reboul, Olivier] 『レトリック』 佐野康雄訳、白水社。 [原書：1984年]

- 佐藤卓己 (1992) 『大衆宣伝の神話 マルクスからヒトラーへのメディア史』弘文堂。
- Schmitz-Berning, Cornelia (2000) : Vokabular des Nationalsozialismus. Berlin/ New York.
- Sluzalek, Ralf (1987) : Die Funktion der Rede im Faschismus. Oldenburg.
- Straßner, Erich (1987) : Ideologie – SPRACHE – Politik. Grundfragen ihres Zusammenhangs. (Tübingen)
- 鈴木佑治 (1999) 「日米の政治言説と誤解のメカニズム」、『現代日本のコミュニケーション環境』(関口一郎編) 97-130頁。
- 田野大輔 (2003) 「民族共同体の祭典——ナチ党大会の演出と現実について——」 『大経大論集』第53巻第5号 185-219頁。
- テラー、ジェームズ / ウォーレン・ショー (1993) [Taylor, James/ Warren Shaw] 『ナチス第三帝国事典』 吉田八岑訳 三交社。
- 若田恭二 (1995) 『大衆と政治の心理学』 劉草書房。
- 脇阪豊・川島淳夫・高橋由美子 (編) (2002) 『レトリック小辞典』 同学社。
- ウィルソン、トマス (1553/2002) [Wilson, Thomas] 『修辞学の技術』 上利政彦ほか訳 九州大学出版会。[原著はThe Arte of Rhetorique, 1553]
- Vollnhals, Clemens (Hrsg.) (1992) : Hitler: Reden, Schriften, Anordnungen: Februar 1925 bis Januar 1933. Bd. 1. (München/ London/ New York/ Paris)
- ウェールズ、ケーティ (2000) [Wales, Katie] : 『英語文体辞典』 豊田昌倫ほか訳 三省堂。[原書：1989年]
- Wells, Christopher. J. (1990) : Deutsch: eine Sprachgeschichte bis 1945. (Tübingen)
- 山本秀行 (1998) 『ナチズムの時代』 山川出版社。

Zu Hitlers Redestil

Am Beispiel seiner Rede auf der NSDAP-Versammlung am 12. 12. 1925

Hiroyuki Takada

Die nationalsozialistische Propaganda bestand im wesentlichen aus Hitlers Reden, zu deren effektiver Inszenierung vielerlei Möglichkeiten von Optik und Akustik vor Ort ausgenutzt wurden, wie z. B. Fackeln, Lichter, Fanfaren und Sprechchöre. Hitler äußerte in seiner Schrift „Mein Kampf“ die Überzeugung, daß die großen Revolutionen ihre Fortschritte nicht den großen Schriftstellern, sondern den großen Rednern verdanken, weil die Volksmassen „immer nur der Gewalt der Rede“ unterlägen. Für Hitler, der als Adressant das geistige Niveau bzw. die Aufnahmefähigkeit der Massen als Adressaten für sehr niedrig hielt, stellten die Beschränkung auf nur wenige wichtige Punkte und deren schlagwortartige Wiederholung wesentliche Notwendigkeiten bei der wirkungsvollen Überredung dar. Die Rhetorik, die einem verschiedenartige Mittel zur eindrucksvollen Gestaltung der Rede zur Verfügung stellt, besteht aus fünf Produktionsstadien, nämlich „inventio“ (Erkenntnis des Themas), „dispositio“ (Gliederung des Stoffes), „elocutio“ (sprachlich-stilistische Bildung), „memoria“ (Einprägung ins Gedächtnis) und „actio“ (Präsentation). Hitler war bekanntlich in der „actio“, also in seiner Aussprache, Mimik und Gestik, ein unverkennbar „ausgezeichneter“ Redner.

In der vorliegenden Arbeit soll auf die „dispositio“ und „elocutio“ hin die Rede Hitlers auf der NSDAP-Versammlung in Dingolfing am 12. 12. 1925

analysiert werden. Der Redner, der sich nach dem fehlgeschlagenen Münchner Putsch im November 1923 entschlossen hatte, die Staatsmacht auf legalem Weg zu übernehmen, begann im Februar 1925 mit der Reorganisation der NSDAP zu einer Führerpartei und also wieder mit Reden auf Versammlungen. Hitlers Rede in Dingolfing gehört daher zu seinen frühesten nach dem Neubeginn seiner politischen Tätigkeiten. Nach der „dispositio“ läßt sich diese Rede in vier Teile gliedern: I. „exordium“ (Einleitung), II. „narratio“ (Darlegung), III. „argumentatio“ (Beweisführung) und IV. „conclusio“ (Redeschluß), wobei in Abschnitt I die Vergangenheit, in den Abschnitten II und III die Gegenwart und in Abschnitt IV die Zukunft jeweils Erwähnung findet.

In bezug auf die sprachlich-stilistische Bildung der Rede („elocutio“) muß zuerst auf die sehr beliebte dichotomische Darstellung der Sachverhalte hingewiesen werden: *Christen/ arisch/ gegen Judentum/ materialistische verfaulte Welt*. In einer Zeile heißt es in einer stilistischen Antithese (*nicht A, sondern B*): *Auch damals kam die Überwindung nicht von staatlichen Machtmitteln, sondern durch eine Heilslehre*. Die Volksmassen mögen nach der Beurteilung von Hitler „nicht viel Differenzierungen, sondern ein Positiv oder Negativ, Liebe oder Haß, Recht oder Unrecht, Wahrheit oder Lüge“. In der Zweiteilung Freund – Feind können nur „Freunde“ positiv, liebevoll sein und recht haben. Auch der häufige Gebrauch der Pronomen der 1. Person Plural (*wir, unser, uns*) trägt zur Prägung der Solidarität der „Freunde“ bei. Außerdem hat die rhetorische Frage die Wirkung, die psychologische Distanz zwischen dem Redner und den Zuhörern zu vermeiden. Die biologisch-pathologischen Metaphern *eine vom Judentum verseuchte materialistische Welt, eine Periode, von Gift erzeugt, in einer vergifteten Welt* und die Führer *lahm* legen versuchen durch ihre Kraft des „Horrorappells“ die Vernunft des Publikums zu Ungunsten der

„Feinde“ auszuschalten.

Das Stilmittel Hyperbel wird in der Rede in den superlativischen Formen *erbärmlichst*, *ungeheuerlichst*, *höchst* und *best*, in den indefiniten Pronomen generischen Inhalts *alle* und *jeder* und im Wort *fanatisch* verwendet. Auch die Voraussetzung mit der Konjunktion *wenn* erlaubt dem Redner, nach Belieben alles Erwünschte als etwas Reales einseitig vorauszusetzen (*wenn... , dann ...*). Während der pleonastische Ausdruck *große Weltbewegung* schließlich zur Übertreibung dient, haben die semantisch vagen Formulierungen *in vielem*, *im Grunde genommen* und *Es mögen noch 20 oder 100 Jahre vergehen* die Funktion, die Vernunft bei den Adressaten auszuschalten. Bei den zwar positiven, aber inhaltsarmen Abstrakta *Frieden*, *Überzeugung*, *Wille*, *Idee* und *Entwicklung* handelt es sich um eine „ideologische Polysemie“. Mit der Einsetzung einer Reihe von Modalverben teilt Hitler den Zuhörern seine eigene Stellungnahme zu den jeweiligen Sachverhalten mit, nämlich die Möglichkeit, die Notwendigkeit, die Erlaubnis, den Wille und zuletzt die Versicherung bzw. die Prophezeiung (*Es wird eine Zeit kommen, wo unsere Idee anerkannt sein wird*). Die Wiederholung derselben Satzteile wie z. B. *Auch damals .../ Auch damals ...* (Anaphor), *... gebrochen werden/ ... gebrochen werden* (Epipher) und *Trotz aller Hemmungen und Verfolgungen, aller Verbote und aller Versuche...*, verleiht diesen Formulierungen einen schlagwortartigen Charakter und damit einen gewissen unauslöschlichen Eindruck. Das gleiche kann auch in der Alliteration *Der Wille ebnet den Weg* und im Nacheinander desselben Konsonanten in *wenn wir für eine Bewegung kämpfen, die die Menschen unseres Blutes aus dieser Welt des Materialismus befreien und ihnen den seelischen Frieden wieder geben will* beobachtet werden. Auch Satzkonstruktionen können dank des Chiasmus und Parallelismus ebenfalls als Variationen der Wiederholung empfunden werden.

Insgesamt versuchte Hitler mit einer Rede in Dingolfing erfolgreich, durch den Einsatz all dieser oben geschilderten rhetorischen, sprachlich-stilistischen Mitteln die Zuhörer zu seiner „Bewegung“ zu überreden.